大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

アメリカにおけるユグノ-の経済活動：サウスカロライナを中心に (藤井定義/耳野皓三教授記念号)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2009-08-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 金, 哲雄
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00001618

アメリカにおけるユグノーの経済活動

—サウスカロライナを中心に—

金　哲　雄

1. はじめに
2. アメリカにおけるユグノーの経済活動
3. サウスカロライナーにおけるユグノーの経済活動
〔I〕ユグノーの経済活動
〔II〕ユグノーの奴隷所有
〔III〕ユグノーの政治的地位
4. むすび

1. はじめに

イギリス植民地のアメリカへのユグノーの移住数は，1700年まで約1,500人と推定されている。(1) 彼らのほとんどは，フランス西部ないしは北西部の出身者であった。1697年のサウスカロライナの同化リストによれば，西部出身が56，北部%出身が16%，中部出身が14.5%，南部出身が13%であった。ここで注目すべきことは，ロンドンへの南部出身数6%に比較して，南部出身が13%という大きな数を占めていることである。(2) そして彼らのほとんどは，ロンドンで苦い体験を経た後に移住して来た，20代の未婚の熟練職工達であった。(3)

本稿では，このようなユグノーが，他の亡命先であるイギリス，オランダ，ドイツ，スイスにおいて(4)と同様に，アメリカにおいて経済発展に大きな役割を

(1) Jon Butler, The Huguenots in America A Refugee People in New World Society, Harvard University Press, 1983, p. 49.

(2) Ibid., pp. 54-55.

(3) Ibid., p. 202; L. M. ハッカー著，中島健一・三浦進訳『アメリカ資本主義の勝利』上，東京大学出版会，1953年，126頁。

(4) 拙稿「ユグノーの経済史的研究への一つの序論」大阪府立大学『経済研究』1983年第28巻第4号，81～98頁，「ユグノー亡命の金融・財政的帰結」大阪府立大学『歴史研究』1984年第23号，70～75頁を参照。

果たしたかどうかをサウスカロライナを中心に明らかにしたい。また，仮に大きな役割を果したとするならば，その要因も併せて探究していきたい。そして，これらの目的はウェーバーの植民地類型論とも関連する重要な課題なので，この点についても検討していくこととする。ウェーバーは，同じイギリス植民地のアメリカの中に，ニューイングランドと南部にみられる対照的な異質の植民地が存在したことを明言し，そして両タイプの植民地の相違の要因として，移民の思想，宗教やエートスの相違を指摘している。(5) しかし，この指摘が妥当かどうかは，アメリカ，特にサウスカロライナの経済活動におけるユグノーの役割を解明することによってある程度立証されるものと思われる。

2. アメリカにおけるユグノーの経済活動

ナント勅令廃止（1685年）以前の50年間，ユグノーの多くは，西インド諸島に亡命地を求めた。ここで彼らは，カトリック教徒に対して数的に及ばなかったけれども，富の力においては圧倒していた。すべての港がユグノーの船長，水先案内人，商人で溢れ，企業心に富んでいたがゆえに，カトリック教徒よりも商取引において優れていたという。しかし，西インド諸島は，ユグノーにとって恒久的な移民地にはならなかった。ナント勅令廃止前後，その定住者の多くは，マサチューセッツ，ニューヨーク，サウスカロライナへ移住し，イギリス人やオランダ人の保護下で安全な地域を確保した。(1)

1679年にブドウ酒，油，絹やその他の南国の生産物の製造が企図された。その実現のため，ユグノーの多くがイギリスから護送された。製造されたブドウ

---

(5) Max Weber, Gesammelte Anfsätz zur Religionssoziologie, I, Tübingen, 1920. 〔Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus〕 S. 28, S. 37f, S. 193, S194f. 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店，1988年，23頁，36頁，254頁，255頁，大塚久雄『社会科学における人間』岩波新書，1977年，11～8頁を参照。

(1) Allen Marquand, "Huguenot Industries in America," Proceeding of the Huguenot Society of America, I, 1884-1888, p. 87; Charles Washington Baird, History of the Huguenot Emigration to America, I, New York, 1885, p. 209.

酒の一部はイギリスへ輸送され，その最良の味覚によりますます需要を増加させていた。(2)

1690年には，きわめて多数のユグノーがヴァージニアやカロライナに護送された。サンティー（Santee）河流域の農業植民地では，イギリス人がかなりの財産とプランテーションに不可欠なあらゆる手段を所有していたにもかかわらず，ユグノーが築いたものはイギリス人のものよりも優れていた。ユグノーはほんのわずかな生活必需品を所有していたにすぎず，またその仕事にすら慣れていなかったのである。1701年にユグノーの定住地を訪問したイギリスの旅行者ローソン（Lawson）は，彼らの服装の清潔さと品位，家の壮美や他の植民者よりも優れたあらゆる状況を賞賛した。そして彼は，イギリス人に対するユグノーの優越性をユグノーの中に支配している結合心に帰し，ユグノーは一つの種族，一つの家族のように生活し，互いに助けながら同国人の運命と名声をあたかも自分自身のものとしていた，と語っている。(3)

ユグノーは，ペンシルヴァニア，ニューヨーク，ロードアイランド，マサチューセッツにおいてブドウ酒の製造を企図した。ウィルアム・ペン（William Penn)はブドウ栽培を重要視し，1683年にロンドンの「商人の自由協会」(Free Society of Traders）に次のような内容の手紙を書いている。「ブドウ酒の増進やリンネルの製造を目標とするものであれば何でもこの地域で奨励せざるを得ない。というのは，フランスの人々はその企図を実現させる可能性をもっているからである。そのために有能な人々と共にフランスから数千本の植物を送ってくれることを忠告したい」と。(4)

ニューヨークのフランス自由人の階層別リストによれば，ユグノーが主として商取引に従事していたことがわかる。31人が商人，20人が桶屋，17人が海員，16人が大工あるいは建具屋であった。残りは多くの単純な職業に従事し，銀細工師や金細工師を除外しては，工業に従事するユグノーは皆無であった。

（2） Johon Leander Bishop, A History of American Manufactures from 1608-1860, I, Philadelphia, 1864, p. 271.

（3） Charles Weiss, Histoire des Refugies Protestants depuis la révocation de l'Edit de Nantes, I, Paris, 1853, pp. 395-396.

（4） Marquand, op. cit., pp. 89-90.

この時期の製造業はきわめて従属的な地位しか占めていなかった。(5)

しかしながら18世紀中葉までには，製造業に従事するユグノーの才能が明らかになっている。1742年に南部のユグノー植民者ドュブレーユ (M. Dubreuil) は，種から繊維をほぐす綿繰り機械を発明した。その発明によって，綿の栽培は，最大の障害物が取り除かれて大いに促進されることとなった。(6) サウスカロライナでは1755年，パンクネー (Mrs. Pinckney) がチャールストン近辺で多量の良質な絹を製造した。また，夫人は藍も栽培し，それはまもなくフランス植民地商業において最も収益をもたらす品目の一つになった。(7)

数年後にフランクリン (Dr. Franklin) は，フィラデルフィアにおいて生糸の製糸業を確立したが，ユグノーだと思われるフランスの熟練工によって管理された。1770年3月，ユグノーであるウィリアム・モリヌー (William Molineux) がニューイングランドで紡績学校を設立し，服地の製造に従事していた。彼は大きな犠牲を払って紡績工場を設立し，2人の少年が絶えず50台以上の織機を作動させることができるような機械を改良した。彼はまた，織機や，商品を完成させるための圧搾機を設置し，多量の商品における美や色を同質に保存するための染色工場を設立した。(8)

ユグノーが従事した帽子製造業も，この時期に現われている。1731年には，ロンドンの帽子製造業者から不満が出る程，ニューイングランドで帽子が製造され，輸出された。その結果，帽子やフェルトの輸出禁止，その違反者には500ポンドの罰金を課する，という条例がジョージ2世の治世下で出るに至った。帽子製造業に対する制限がますます厳しくなっていった。帽子製造業者は2人以上の従弟を持ってはいけないし，黒人を働かせてはいけなかった。そして，自分自身が帽子製造業者になる際には7年間の従弟を経なければならないというものであった。このため，1731年まで前進を遂げた帽子製造業は，その後衰退へかったの道を歩むこととなった。(9)

---

(5) Ibid., p. 91；アメリカ学会編『原典アメリカ史』第1巻，岩波書店，1950年，33頁。

(6) Bishop, op. cit., pp. 351-352.

(7) Marquand, op. cit., pp. 91-92.

(8) Ibid., p. 92.

(9) Ibid.

ユグノーが才能を発揮した，もう一つの産業が金属工業であった。1750年以前のニューヨークにおける銀細工師や金細工師のうち，次のようなユグノーの名前を見つけることができる。

		自由人
ピーター・ヴェルジュロ	(Peter Vergereau)	1721(年)
ジョン・ル・ルー	(John Le Roux)	1722
チャールズ・ル・ルー	(Charles Le Roux)	1724
ジョン・アスティエ	(John Hastier)	1726
トヴェ・ベスレー	(Thauvet Besley)	1727
ステファン・ブルデ	(Stephan Bourdet)	1730
ウィリアム・ウルトン	(William Hourton)	1731
クリストファー・ロベール	(Christopher Robert)	1736
ピーター・カンタール	(Peter Quintard)	1737
ジョン・ムリナール	(John Moulinar)	1744

これら以外にこの時期の金細工師としてダニエル・ドュピュー (Daniel Dupuy) とピーター・ダヴィド (Peter David) を挙げることができるが，彼らはニューヨークからフィラデルフィアへ移住していた。このようにニューヨークにおいて銀細工師や金細工師が比較的多く存在していたことは，銀皿や宝石に対する需要が大きかったことがうかがえる。したがって，この熟練職工階層は自らの職業を変えようとはしなかったのである。(10)

ユグノーの金細工師のうち最も注目すべき人物が，才能豊かなポール・ルヴェール (Paul Revere) であった。彼は，ボストンで金細工に従事していた父の意志を継ぎ，より一層才能を開花させていった。彼は生まれつき，絵を描く才能を持ち，銀皿に図案を描き彫刻を施した。彼は，「国王の礼拝堂」(King's Chapel)，「最初の教会」(First Church)，「旧サウス」(Old South)，「ボストン」(Boston) 用の銀容器を製造した。コプレー (Copley) によるポール・ルヴェールの肖像画の一つに，片手に銀コップを持ち，彫刻道具を脇に抱えている姿を描いたものがある。彼は，ボストンのリン (Lynn) 通りで工場を設立した。その工場は，真鍮の大砲，教会のベル，彫刻を施した皿を良質に製造することで有名になった。彼の才能によって，銅皿に彫刻が施されるに至った。

(10) Ibid., pp. 92-93.

1775年には彼は印刷機を製造し，マサチューセッツ議会（Provincial Congress Massachusetts）によって命ぜられた最初の紙幣を印刷した。このような才能のゆえに，ポール・ルヴェールは当時のアメリカ自由人の中で最上位の地位を占めるに至った。(11)

アメリカにおける芸術史の記録では，ユグノー出身の他の名前が含まれている。その中には，ウエスト（Benj. West）の弟子である1740年ニューヨーク生まれの肖像画家アブラハム・ドランシー（Abraham Delancy Jr.）と，父がユグノー出身であるトマス・スペンス・ドューシェ（Thomas Spence Duché）が挙げられる。トマス・スペンス・ドューシェもまたウエストの弟子で，シーベリ主教（Bishop Seabury）やプロヴォスト主教（Bishop Provost）の肖像画を描いた。ユグノーの建築家の中で，1796年に移住して来たヘンリー・ラトロブ（Benj. Henry Latrobe）の名前を忘れてはならないだろう。彼は，ペンシルヴェニアの銀行，ワシントンの連邦議会議事堂の南翼，ボルティモアの大聖堂（R. C. Cathedral）を建造した。(12)

以上みたように，アメリカの経済発展におけるユグノーの役割は，大きかったことは否定できない。移住期のアメリカは，農業家や商人達がまっ先に生存のための斗いを行なう状況であった。しかし，まもなくしてサウスカロライナーでは米や綿が，ヴァージニアではタバコの生産が開始された。一方，北部では主として商業活動が展開された。ユグノーが従事した，これらのどのような分野でも，彼らは優雅と好趣味の伝統，早い理解力と発明力，快活さと自由愛をもたらした。これらは，アメリカ文明における最も貴重な所有物の一つとされている。(13)

この期間の典型的なユグノー商人であるサウスカロライナのマニゴール家（Manigaults），ニューヨークのド・ランセー家（De Lanceys），ボストンのファニュイル家（Faneuils）は，18世紀の植民地貴族の地位を確固として築いた。ピーター・ファヌーユ（Peter Faneuil）のボストンへの永久寄贈物であるファヌーユ・ホール（Faneuil Hall）は，その政治的・経済的業績における

(11) Ibid., p. 93.
(12) Ibid.
(13) Ibid., p. 94.

象徴である。ユグノーの上層中産階級も経済成功を遂げ，比較的高い生活水準を保障していた。きわめて多数のユグノーはニューヨーク，スタテンアイランドにおいて中規模の農場を経営し，ボストン，ニューヨーク，チャールストンの高度な都市経済において重要な地位を確保していた。特に，サウスカロライナにおいては中規模以上の土地を獲得していた。(14)

ユグノーの政治的成功は，その経済的成功をさらに強化した。最も富裕なユグノーはマサチューセッツ，ニューヨークの「総会議」(Council) においてかなりの数を占め，サウスカロライナーの「代議会」(Assembly) においては議長として活躍した。上層のユグノーはボストンにおける18世紀市政の委員会の一員として，ニューヨーク「市会」(Common Council) の議員として，ニューロッシェル，スタテンアイランドの官史として，サウスカロライナの「代議会」の議員として従事した。彼らのこのような地位は，アメリカのイギリス植民地におけるユグノーの確固とした経済的成功の証拠となっている。(15)

3. サウスカロライナにおけるユグノーの経済活動

〔I〕ユグノーの経済活動

サウスカロライナにおいては，ユグノーの商人や職工はチャールストンに定住するのを好んだ。これらの正直で勤勉なユグノーの到着は，新たに創設されたイギリス植民地にとって幸運な収穫であった。インディアンと商取引をするものもおれば，商業を次第に大規模に転換させるものもいた。ローラン家 (Laurens)，マニゴール家，マジック家 (Mazycq) は，まもなく最も富裕な家系として登場してきた。また，絹，羊毛の工場を設立し，ラシャを製造するものもいた。彼らはまた，「ロウマルズ」(romalls) という名で需要の大きかったリンネル服の大工場を設立した。18世紀の後半サウスカロライナのニューボルドーにおいては，ユグノー亡命者の努力によって工場が設立されたという。特にこの地域でユグノーが設立した絹工場は，大いなる繁栄をもたらし，アメリカ全体の富を一層増加させた。(1)

(14) Butler, op. cit., p. 200.

(15) Ibid., pp. 200-201.

(1) Weiss, op. cit., pp. 396-397.

ユグノーはまた，種々の農業を営んだ。ロンドンのガブリエル・ボントファ（Gabriel Bontefoy）への1683年のルイ・ティブ（Louis Thibou）の手紙では，サウスカロライナで収穫された多数の作物について言及されている。食物は「魚がいっぱいのすばらしい川」から得られるだろう。土壌は「数多くのえんどう豆，小麦，メロン」を生み出している。さくらんぼは「ぶどう酒と同じように赤くなっている」。豚や牛は森の中で飼いならされ「ただミルクを与えることが仕事となっている」。マディラ産ぶどうは「甘く，風味があり，果汁のつまった」果実を生み出した。(2)

現実はたとえティブの手紙で叙述された程は誇り輝くものでなかったとしても，ユグノーは様々な穀物を栽培し，果物を収穫し，動物を屠殺していたことは確かであった。1696—98年のほんの2年間でも，植民地書記官は，サンティー，オレンジクォーター（Orange Quarter），バークレー州（Berkeley County）の聖ジョン教区（St. John's Parish）の定住地における14人のユグノーに対して，牛の刻印を記録している。刻印においてイサック・マジック（Isaac Mazyck）は，亡命者がフランスでの迫害をまだ忘れていないということを表示した。彼が牛などの右尻に「ルイの花」（Flower-de-Luis）という烙印を押したので，牛でさえ，カロライナの泥の中をころげ回り「太陽王」（Sun King）を中傷したのであった。(3)

特に1720—50年のサウスカロライナにおいて，ユグノーの農業活動は顕著であった。1730年以降の財産目録によれば，ユグノーが農業から収入を得，大規模な農業を経営していたことが分かる。彼らは，サウスカロライナで特に有名になった主要な穀物や生産物のあらゆるものを生産した。彼らの財産目録は，米，海軍用品，穀物，家畜，そして1740年以降のインディゴで満ち溢れていた。小さな財産には当然，豚（馬はまったくなかった），米（穀物はほとんどなかった）が含まれていた。一方，比較的大きな財産には，18世紀中葉のサウスカロライナにおける混合的な，そして驚くべき程の自給自足的なプランテーション経済が示されている。(4)

（2）Butler, op. cit., p. 99.
（3）Ibid., p. 99.
（4）Ibid., p. 121；サムエル・モリソン著，西川正身翻訳監修『アメリカの歴史』1，集英社，1970年，124頁。

ユグノーがこの急速に展開していく植民地社会においてどれだけ才能豊かであったかは，銀細工師であるニコラス・ド・ロンジュマール（Nicolas de Longemare）の経歴をみれば分かる。彼の父とボストンへの亡命者ソロモン・レガレ（Solomon Légaré）と共に，彼はサウスカロライナの最初の銀細工師や金細工師の一人としてきわめて有名であった。1703—10年の彼の会計簿をみれば，彼がどれだけ非凡で，賢明で，幅広く活動していたかが証明されている。彼は銀や真鍮の判，靴の締め金，真鍮の分銅，スプーン，フォーク，喪や結婚の指環，眼鏡，サウスカロライナの政府用，公務用の様々な型の判を製造した。(5) ニコラス・ド・ロンジュマールを代表として，ユグノーの多くは，チャールストンにおける銀細工師の商取引を支配していた。少なくとも13人のユグノーが1710—70年に金細工師として従事していた。(6)

しかし，ニコラス・ド・ロンジュマールが経営するチャールストンの店では，銀以外に他の品物が販売されていた。彼はまた，ラム酒，オリーブ油，亜麻仁油，ランプ油，鍬を取引していた。彼は1685年にサンティーにおける100エーカーの土地を購入し，またクーパー河（Cooper River）流域の土地も所有した。彼は1696年にサウスカロライナの書記官と共に，牛や豚に烙印を押した。彼の会計簿によれば，彼は，生糸，蚕の印，ラシャを取引していたサンティーの農場で数ケ月居住し，牛の囲いを他の農場主に貸付け，小麦，綿，牛肉，羊肉を販売していた。(7)

サウスカロライナにおけるユグノーの知識層は，様々な職業に従事した。1734年のサウスカロライナの官報（Gazette）によれば，ユグノーは88人の治安判事のうち15人（17.0%）であった。これらの知識層よりも下位に分類されていた層は，それ程富裕ではなかったが，チャールストンで専門的な商取引や職業に従事していた。確かにユグノーのすべてが農業主やプランターになったわけではなかったが，サウスカロライナの人々はチャールストンのユグノー商人から干しぶどうから本に至るまでのあらゆるものを購入することが可能であ

(5) Ibid., p. 100.
(6) Ibid., p. 131.
(7) Ibid., p. 100.

った。ユグノーはフランス語，ラテン語，ギリシャ語，ドイツ語，算術，歴史を教えた。彼らはキャンデー，剃刀，剣，ナイフを製造した。彼らはビールを醸造し，よい馬屋（Stabling）を供給した。彼らはまた，あらゆる種類の女性のヒステリー憂うつ症（Women's Hysteri〔a〕Vapours）用の膏薬（Plaster）を始めとする薬を販売していた。(8)

このように，ユグノーは18世紀のイギリス植民地における新たな社会の担い手となった。彼らは既存の社会に単に融合するのではなく，主要な社会の型を創造する上で大きな役割を果した。1745年頃までには，彼らは奴隷所有においてイギリス人を陵駕し，イギリス人よりも大きな財産を集積した。彼らはまた，しばしばサウスカロライナの「代議会」の選挙に勝利し，植民地における大土地所有貴族や大商人貴族の資格を要求したのである。(9)

〔Ⅱ〕ユグノーの奴隷所有

サウスカロライナのユグノーは農業経営規模を拡大するにつれて，ますます多くの奴隷を所有するに至った。サウスカロライナの財産目録によれば，ユグノーがきわめて多くの奴隷を所有するのに熱中していたことが分かる。彼らは1690年代に獲得した大農場で働かせるため，奴隷購入に邁進した。1736—45年にユグノーのプランターは，一人当り平均25.5人の奴隷を所有していた。その平均数は，1746—55年に33.3人に増加し，1756—65年に19.2人に減少した。(1)

ユグノーの中にはかなり多数の奴隷を所有していたものもいた。例えば，1746—55年の財産目録ではベンジャミン・ゴダン（Benjamin Godin）が1749年に353人の奴隷を，ダニエル・ユジェ（Daniel Huger）が1755年に369人の奴隷を所有していたことが分かる。しかし，より重要なことは中産階級のユグノーが所有していた奴隷数である。1746—55年のユグノーの平均奴隷所有数は，19.5人という依然と高い数を示していた。また，1736—66年ではすべてのユグノーの半数が5—25人の奴隷を所有していた。(2)

ユグノーは奴隷貿易からも利益を得た。例えば，ジョン・ゲラール（John

---

(8) Ibid., p. 131.

(9) Ibid., pp. 120-121.

(1) Butler, op. cit., pp. 121-122.

(2) Ibid., p. 122.

Guerard）は18世紀のチャールストンにおける指導的な奴隷商人の一人であった。彼は1736—44年に11隻の，1752—61年には14隻以上の奴隷の船荷を輸入した。ジョン・ゲラール程は大規模ではないが，ガブリエル・マニゴール，ソロモン・レガレ，ダヴィド・デア，ジョン・デア（David and John Deas）もまた，1740—70年にたびたび奴隷貿易を行なっていた。そして，多くのユグノーが奴隷貿易に投資し，この収益の多い取引に深く掛かり合っていた。(3)

ユグノーの奴隷所有は彼らの経済的成功の象徴的な証拠となっている。奴隷は通常サウスカロライナの財産目録における総価値の70—80%を構成していたので，ユグノーとイギリス人の奴隷所有数を比較することによってユグノーの経済的業績に対する合理的な評価が得られる。表1では，1736—66年のサウスカロライナにおけるユグノーとイギリス人の奴隷所有数に関する比較が明らかにされている。それによれば，ユグノーのほとんどがきわめて多数の奴隷を所有していたことが分かる。1736—65年のいずれの期間も，ユグノーは奴隷所有数や富の蓄積においてイギリス人に劣ることはなかった。事実，1736—45年にユグノーは奴隷所有数においてイギリス人を凌いでいた。61人以上の奴隷を所有しているユグノーの割合（12.2%）は，イギリス人のそれ（4.7%）の2倍以上となっている。11—60人の奴隷を所有しているユグノーの割合が約60%であるに対して，イギリス人のそれは40%に過ぎないのである。逆に，1—10人の奴隷しか所有していないユグノーの割合はほんの3分の1に過ぎず，それに対してイギリスのそれは過半数となっている。(4)

1745年の聖ジェームズ・グース・クリーク教区（St. James Goose Creek Parish）の納税者リストによると，ユグノーが大教区でいかに暮らし，18世紀中葉までユグノーの経済的成功がいかに大きかったかが分かる。その59人の納税家族リストの中に，11人のユグノーの名前が出ている。その11人のうち4人が50人以上の奴隷を所有し，最多の奴隷の所有者であるポール・マジックに至っては79人の奴隷を所有していた。そして，ユグノーの家族のうち奴隷を所有していないものは誰もいなかった。(5)

（3） Ibid.

（4） Ibid., p. 123.

（5） Ibid., pp. 123-124.

18世紀の後半期になるとユグノーの奴隷所有数の割合が前半期に比べて漸次的に減少していくが，それにもかかわらずユグノーがサウスカロライナにおいて経済的に重要な地位を占めていたことには変わらなかった。1746—55年と1756—65におけるユグノーとイギリス人との比較（表1）をみると，1—10人

表1　サウスカロライナの奴隷所有　1736—65年（数と割合）

奴隷数	1736—1745		1746—1755		1756—1765	
	ユグノー	その他	ユグノー	その他	ユグノー	その他
1－10	12(29.3)	212(54.8)	22(37.3)	370(48.4)	29(48.3)	377(46.7)
11－60	24(58.5)	157(40.6)	30(50.8)	339(44.3)	25(41.7)	365(45.2)
61＋	5(12.2)	18(4.7)	7(11.9)	56(7.3)	6(10.0)	65(8.1)
計	41	387	59	765	60	807

（出典：Jon Butler, The Huguenots in America A Refugee People in New Society, 1983, p.124.）

の奴隷しか所有していないユグノーの割合が29.3%から37.3%へ増加し，11—60人の奴隷を所有しているユグノーの割合が58.5%から50.8%へ減少したことが分かる。1756—65年では，ユグノーとイギリス人はほぼ同じ割合で奴隷を所有していた。61人以上の奴隷を所有しているユグノーの割合（10%）は，イギリスのそれ（8.1%）よりも，ほんのわずか高い程であった。しかし，11—60人の奴隷所有においてはイギリス人の割合（45.2%）はユグノーのそれ（41.7%）よりも高いことを示していた。(6)

ピェール・マニゴールは，サウスカロライナにおけるユグノー成功者の典型であった。彼や妻のジューディス・ジトン（Judith Giton）の経験は，ユグノーがサウスカロライナの広大な奴隷制プランテーションにおいてどのように成功を遂げたかを示している。彼は1680年にラ・ロッシェル（La Rochelle）から若い独身の身でサウスカロライナに到着した。彼は中規模な商業活動を行ない，農業活動に従事しながら奴隷を所有するに至った。1699年，彼とジューディス・ジトンは結婚した。確かに彼女の最初の生活は幸福でなかったが，晩年期の10年間は豊かな生活を送った。ピェールは，彼の息子ガブリエルに成功を

（6）Ibid., pp.124-125.

遂げた商業を残し，1729年に死去した。(7)

次の半世紀において，ピェール・マニゴールの後継者たちはきわめて影響力のあるプランターや政治家となり，その富により18世紀最大の富裕なアメリカ植民者として登場してきた。1730年代にガブリエル・マニゴールは商業活動を多彩に展開し，プランテーションを拡張した。彼の富と社会的名声により，彼は1735年に31才の若さで会計係の官吏として従事し，1743年から10年間，サウスカロライナの「代議会」の重要な立法府議員として勤務していた。彼が1754年にその議員を退職した時，その地位を23才の長男ピーターに譲った。ピーター・マニゴールは約20年間「代議会」の主要なメンバーに留り，1765年には信望高い議長の座を引き受けた。彼が1773年に42才という若さで死去した時，その残された財産は独立革命前夜の植民地における最大のものであった。その個人財産は，約300人の奴隷も含め，32,700ポンドに達した。彼の父ガブリエル・マニゴールが1781年に死去した時，同規模の大財産を残した。彼は490人の奴隷と，それ以外にマンション，家，建築物，47,532エーカーの土地を含んだ多くの財産を所有していた。(8)

〔Ⅲ〕ユグノーの政治的地位

18世紀を通じて「代議会」におけるユグノーの活躍は，彼らの経済的成功に照応していた。表2が示しているように，ユグノーの「代議会」における地位は，「教会条例」(Church Act) の可決が植民地における主要な政治的課題になった1706年以降，急激に上昇した。1707—21年にユグノーは，「代議会」30議席のうち3議席を常に確保していた。その議席数が1725—36年には，38議席中平均5議席まで増加した。それ以降の20年間，ユグノーの代表数は激増し，1736—57年には42—45議席のうち平均139議席が保持された。1757年以降では，ユグノーの議席数は45—51人中9人に留まった。これは初期から一貫して高い割合を示してきたものからすれば低下を意味するが，しかし植民地における白人人口の割合から判断すれば，2倍以上の議席を保持していたのである。(1)

「代議会」内部ではユグノーは，その数と地位に応じた指導的な役割を果し

(7) Ibid., p. 125.
(8) Ibid., pp. 125-126.
(1) Butler, op. cit., p. 127.

た。他の議員と同様にユグノー議員も，植民地社会の上層身分であった。1770年以前の財産目録に出てくる23人のユグノー議員のうち，2人を除いたすべてが一人当り20人あるいは20人以上の奴隷を所有していた。そのうちの半数は，晩年期に60人あるいは60人以上の奴隷を所有していた。（例外的だが，長い間指導的な奴隷商人であったチャールストンの「代議会」議員ジョン・ゲラールは晩年期には14人の奴隷しか所有していなかった。）これらのユグノーの富や名声により，彼らは独立革命以前の「代議会」において指導的地位を占めるに至った。18世紀の南部における「代議会」に関するジャック・P・グリーン（Jack P. Green）の研究によると，サウスカロライナのユグノーは，1710年頃から果し始めた指導的役割を，さらに高め最上位の指導者のうち約10％を構成していたことが確認されている。そして，ピーター・マニゴールが1765年に議長の座に付いたことは，植民地におけるユグノーの政治的地位の象徴であった。(2)

表2　サウスカロライナ代議会におけるユグノー　1691—1776年

代議会番号	年	選挙区	ユグノー選挙区	議席総数	ユグノー議席総数
領主議会 (*Proprietary assemblies*)					
1	1692—94	3	1	20	7
2	1695	—	—	19[a]	2
3	1696—97	2	1	30	2
4	1698—99	2	1	30	1
5	1700—02	2	0	30	1
6	1702—03	2	1	30	1
7	1703—05	2	1	30	1
8	1706—07	2	2	30	3
9	1707	—	—	28	0[a]
10	1707—08	2	0	30	0
11	1708—09	—	—	34	3
12	1710—11	2	1	30	3
13	1711—12	2	1	30	2
14	1713—15	2	2	30	3
15	1716—17	2	1	30	2
16	1717	10	4	30	4
17	1720—21	—	—	35	3

（2）　Ibid., pp. 127-130.

王議会 (*Royal assemblies*)					
1	1721—24	—	—	49[a]	2
2	1725—27	12	3	38	5
3	1728	12	3	38	4
4	1728	12	2	38	3
5	1728	12	2	38	2
6	1729	12	4	38	5
7	1729	12	2	38	2
8	1730	12	4	38	6
9	1731—33	12	4	38	8
10	1733—36	12	5	38	8
11	1736—39	14	9	42	14
12	1739—42	14	7	42	17
13	1742—45	14	8	42	19
14	1745—46	15	9	43	12
15	1746—47	15	7	43	13
16	1747	15	7	40[a]	11[b]
17	1748	16	9	44	11
18	1749	—	—	—[a]	—
19	1749—51	16	8	44	14
20	1751—54	16	10	44	16
21	1754—57	17	10	45	12
22	1757—60	18	7	45	7
23	1760—61	18	4	47	5
24	1761	19	8	48	11
25	1762	19	6	48	8
26	1762—65	19	4	48	4
27	1765—68	20	9	50	11
28	1768	22	8	50	9
29	1769—71	23	8	51	11
30	1772	21	6	46	8
31	1772	21	6	48	8
32	1773	21	8	48	11
33	1773—75	21	11	48	15
州議会 (*Provincial congresses*)					
1	1775	27	14	207	33
2	1775—76	27	14	204	29
総議会 (*General assemblies*)					
1	1776	27	13	202	29

a：これらの議員数は正確ではない。
b：この代議会は一度も会合されなかった。
(出典：Butler, op. cit., pp. 128-129.)

ジョン・バットラー（Jon Butler）は，サウスカロライナの政治的成功が民族的な結合力よりもむしろ同化によって説明されると主張する。その後のアメリカへの他の移住グループにとっては，公務はたいていは民族的結合力を反映し，強化するものであった。18世紀のペンシルヴァニアにおけるドイツ人やスコットランド系アイルランド人の「代議会」議員は，同族人が多数居住する地域から選出された。同様に，19世紀から20世紀における黒人並ぶにカトリック教徒の議員は，ほとんどいつも，彼ら自身の人種的，宗教的，民族的グループが多数投標してくれる地域を代表していた。しかし，サウスカロライナにおける「代議会」の選挙パターンは，ユグノーと彼らが居住している地域との照応関係を反映したものではなかった。ユグノーは遅くとも1750年までに同化し，文字通り社会の不可欠な構成部分になっていたという。(3)

サウスカロライナにおいては土地を所有しているどの地域でも代議士になれるので，ユグノーは多くの土地獲得により，多くの地域における選挙にとって適任者であった。この利点を無視したガブリエル・モニゴール，ピーター・モニゴールは，彼らの政治的経歴において二つの「教区」しか代表しなかった。しかし，他のユグノーはしばしば地域を変えた。例えば，ダヴィド・エクスト（David Hext）は1736—51年に4つの地域を代表し，イサック・マジックは1736—57年に6つの地域を代表した。1735年まで選挙区の半数においてユグノーが選出されている。1736—39年の第11次「王議会」（Royal Assembly）では，ユグノーがサウスカロライナの政治にどれだけ深く浸透していたかが理解できる。そこではユグノーは14の選挙区のうち10選挙区で選出されていた。このように，ユグノーはいかなる地域でも代表になったのである。(4)

4. むすび

以上みたように，ユグノーが，他の亡命先においてと同様に，イギリス植民地のアメリカ，特にサウスカロライナの経済発展において大きな役割を果したことは明確であろう。ただ，アメリカの場合，ユグノーが主としてイギリス植

(3)　Ibid., p. 130.

(4)　Ibid., pp. 130-131.

民地の重要な担い手として移住してきた点で他の亡命先とは異なっていた。

それでは，ユグノーの経済的成功の要因をどこに求めるべきであろうか？以下，ジョン・バットラーとチャールズ・ヴァイス（Charles Weiss）の見解を紹介し，これらの見解と関連づけてウェーバーの見解を検討してみたい。

ジョン・バットラーはユグノーの成功の要因として，彼らが1680—76年のイギリス植民地における急速な成長期の初期という，きわめてよい時期に到着したことを挙げている。この時期におけるイギリスの植民地政策による魅力的な経済的，政治的環境を利用することになって，ユグノーは著しい物質的成功を遂げたという。特にサウスカロライナにおいては，ユグノーは政府の土地政策により1680—1711年だけでも10万エーカー以上の土地を獲得した。その結果，彼らはサウスカロライナにおいて他の地域をはるかに凌ぐ物質的な土台を築き上げ，そしてサウスカロライナへ後に到着したイギリス人よりも大きな成功をしばしば収めていたとされている。(1)

チャールズ・ヴァイスは，その要因として，まずチャールズ2世がユグノーの最初の一団をカロライナに意識的に送ったことを指摘している。その理由は，主としてユグノーがフランスで成功を収めた農業分野をアメリカへ移植させたいという期待からであった。そのためには，チャールズ2世は彼らに自由な通行権を与え，彼自身の船さえ提供したという。チャールズ・ヴァイスはまた，ユグノーの急速かつ完全な成功の要因を，彼らの欠乏からの欲求，まじめさ，勤勉さ，相互扶助に求めている。(2)

ところで，ウェーバーは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の中でアメリカの南，北の植民地の相違について「南部の植民地は，営利を目的として大資本家の手でつくられたものだったのに，ニューイングランドの植民地は，牧師・知識人と小市民・職人・ヨウマン〔自営農民〕たちの結合によって宗教的な理由にもとづいて生まれてきたものだった。(3)」とし，そして「あ

---

(1) Butler, op. cit., pp. 201-202.

(2) Weiss, op. cit., pp. 394-395.

(3) Weber, a. a. O., S. 37f. 大塚前掲訳書，36頁。

の年期奉公人の労働力でもって栽培農場をつくって，封建貴族的な生活をしようとした『冒険者たち』と，これに対するピュウリタンの独自の市民的心情とのあいだの，尖鋭な対立によって貫かれている。[(4)]」と述べている。さらに，彼は両タイプの植民地の相違の要因として，特に宗教の差異に注目して次のように述べている。「ピュウリタンのニューイングランド植民地とそれからカトリックのメリーランド，監督教会の南部地方，諸教派の混在したロード・アイランドなどとの間に経済的特性のまぎれもない差異がみられることによって分かるように，それぞれの宗教上の特性から生じている影響が，明らかに独自の要因として役割を果している。[(5)]」と。

これらの見解から出てくる結論はまず，ユグノーがサウスカロライナのプランターに代表されるように，イギリス本国の伝統主義的生活様式をそのままアメリカに移植する上で重要な担い手となったということである。ここでいうユグノーは当然，ウェーバーのいう「営利を目的とした大資本家」，「封建貴族的な生活をしようとした『冒険者たち』」に該当するだろう。したがって，ユグノーをピューリタンとほぼ類似のものとみるウェーバーの見解[(6)]は「監督教会の南部地方」においてはそのまま適用できない。しかし，ユグノーのアメリカ全体における経済的成功にプロテスタンティズムの倫理が何らかの形が関連していたように思われる。それと共に，「割則」概念も考慮に入れなければならない。[(7)]というのは「生地を離れるということだけでも，労働強化のこの上もない有力な手段となりうることは明らか[(8)]」であるからである。

---

(4)　A. a. O., S. 194f. 同上訳書，254頁。

(5)　A. a. O., S. 28. 同上訳書，23頁。この点に関するウェーバーの見解を含めた，宮野氏の南北アメリカの比較経済史的研究（宮野啓二「南・北アメリカの比較経済史的考察」広島大学『経済論叢』1989年第12巻第3，4号）から大きな示唆を得た。

(6)　拙稿「ウェーバーとユグノー」大阪府立大学『歴史研究』1987年第25号，20～1頁を参照。

(7)　同上，30～2頁を参照。

(8)　Weber, a. a. O., S. 27. 大塚前掲訳書，22頁。この点に関連してウェーバーは次のように述べている。「住み慣れたものとはまったく違った環境で労働するという事実だけでも，伝統主義を破壊するのに十分であり，『教育的な』効果を生むものだ。アメリカの経済的発達がこうした作用に基づくことがいかに大きかったかは，指摘するまでもなかろう。」(A. a. O. 同上訳書，22～3頁。)

次に，たとえユグノー自身の主体的，能動的役割がいかに重要であったにせよ，移住地域の経済的社会的な客観条件を考慮に入れなければならない。ここでは，特にユグノーがアメリカに到着した時期並びに当時の土地政策を挙げることができる。ユグノーは，特にサウスカロライナにおいてこのような好条件を利用することによって大土地所有者になっていったのである。ウェーバーが指摘する移民の社会層，目的とそれに関連する移民の思想，宗教と同様に，この経済的社会的条件も，ユグノーの成功の重要な要因とみなければならないだろう。